

## 大草谷津田いきものの里 自然観察会

### 生きものたちの冬支度

山岸文子（千葉市）

日 時：2014年12月21日（日）10：30～12：00 天候：晴れ

参加者：大人5名 子ども1名

担当指導員：岡田敬子・山岸文子

年末で忙しいのか参加者は少なめだったが、前回に引き続き両親に連れられた3歳の男の子が元気に顔をみせてくれた。入口広場で岡田さんが用意した冬芽を見て貰う。フワフワの毛皮のようなモクレンの芽、固い鎧のような芽鱗・・・寒さと乾燥から身を守る為植物たちもしたたかである。広場に植栽されたドウダンツツジの枝の中にオオカマキリの卵のうを捜す。寒さに堪えるように鳥に見つからないように工夫している様子を観察。少し高いミズキの枝の卵のうは鳥に食べられた跡があった。

竹林の辺りでマンリョウを見る。赤い実のついたものと果柄だけになったものがある。男の子に「どうして？」と尋ねると「鳥に食べられた」。すると参加者が鳥に変身。赤い実と白い実のマンリョウを食べ比べて「白実の方が味が濃い！」。ヤブランの黒い実は甘味があるが、鳥さん達の食べる分が無くなっちゃうから全部食べないでね。

杉林の中のサネカズラ。今年は実が赤く熟した途端に鳥に食べられてしまって果托だけが残っている。持参の赤い実を見て貰う。鹿の子のようなイボイボの一粒一粒が果実で、ちょうど鳥の口のサイズに合っている事を話す。もいでみると3個の白い種子が入っている。鳥に食べられる事で種蒔きをしている。「何か、スーッとする感じの味！」、南五味子という生薬で滋養強壮と咳止めに使われる。ヤツデの葉のつき方を観察。一枚一枚の葉が無駄なく太陽の光を受け取ろうとしている。

めじろんばへ出ると常緑樹のシラカシと落葉樹のコナラが対照的な姿を見せる。殆んどまっすぐ伸びるシラカシに対し、林縁から休耕田へ向けて斜めに頑張っ枝を伸ばすコナラ。より多くの日照を欲しているのだ。足元に円形に葉を拡げたカントウタンポポを見る。太陽光をしっかりと受け止める姿勢が参加者にも既に了解済み。

男の子が偶然棒でつづいたところに虫。やややっ、キノカワガだ。そのあまりの擬態の見事さに一同感心してしまった。これでは鳥も見つけれない。

木の幹の窪みにヨコズナサシガメの幼虫がおしくらまんじゅうをしている。北風の当たらない場所の木を捜していた参加者がシラカシの葉の裏にウラギンシジミを見つける。折畳んだ翅の中に触角を仕舞っている。ひたすらじっと動かない。

田んぼにセグロセキレイ。ハンノキ林をモズが行き来している。メジロの声も聞こえる。そろそろノスリも来るだろう。食うか食われるか必死の攻防が続く。

林縁のナガバジャノヒゲの葉が短く刈り取られたような跡がある。昨冬のノウサギの食痕。固くて美味しそうには思えないが雪が積もって食べられる草が何も見つからなかったら我慢するしかない。

トラツグミが落鳥していた。寒さが増すにつれ餌を十分に摂れずに命を落とす生きものもいるが、その結果死体は別の生きものの餌となり命は繋がれていく。

参加者の「生きものたちが様々な工夫をして冬を越し 命を繋いでいる様子が分かった」という感想。当たり前のように暖房に頼って冬を過ごして来た私達。野生生物の省エネの知恵と忍耐力を見習わなくては。